

「東アジア海域の安全保障環境」第1回国内研究会議の概要

セッション1「アメリカの大戦略と古典地政学の理論」

発表：奥山真司

(発表の要旨)

1. 地政学(Geopolitics)とは

凡そ、国家の戦略体系は、国家の持つ技術、それを活用する戦術、戦術を組み立てる作戦、国策の基本を形作る大戦略、それに基づく政策、国家理念といったものに分けることができるが、地政学は、その体系における大戦略に当たるものと考えてよい。地政学は、国際の地理的關係と地形が及ぼす影響に、リアリズム、パワー、支配といった概念をもって国家戦略を考察する学問である。地政学的思考の始祖として、イギリスのマッキンダー等の名前が挙げられるが、古くはカウテリア、孫子、アリストテレスなどの思想哲学にも地政学の要素が取り込まれている。

2. 地政学の基本的な考え方

簡略化してしまえば、地理の単純化(Simplification)、境界化(Demarcation)、交通線と関所(Choke Point/ SLOCs)、勢力均衡(Balance of Power)、橋頭堡と基地(Bridge Head/Bases)によって国家の地政学的意味を導き出すものである。

3. アメリカの地政学観

アメリカの大戦略を地政学から考察すると、以下の通りとなる。

- ①戦略の優先順位は、中東、ヨーロッパ、東アジア(三大地域)の順に大別できる。
- ②アメリカは19世紀のイギリスである。
- ③英・米・日はシーパワー国家である。
- ④ユーラシアに足がかり(朝鮮半島、ドイツ、オランダ)を持つことが国益追求上必須である。
- ⑤ユーラシアからの脅威を分断しておかなければならない。

また、具体的な大戦略として、どの程度世界に関与するかについては、以下の四つの選択肢がある。

- ①完全関与(Primacy)
- ②選択的関与(Selective Engagement)
- ③オフショア・balancing(Off-shore Balancing)
- ④孤立不干渉(Isolationism)

4. 2011年を考える

傾向として、アメリカの衰退と多極化が読み取れる。そのような中での中国の台頭は、アメリカに日本を「バックパッシング」(Buck-Passing)と見る考えを生起させる危険性がある。日本には、日米同盟の更なる追及、中国への包摂、完全独立といった三つの選択肢がある。

セッション2「アメリカ軍によるトモダチ作戦が東アジア海域の安全保障環境に与える影響」

発表：秋元一峰

(発表の要旨)

1. トモダチ作戦の概要

“Operation Tomodachi”「トモダチ作戦」と名づけられたアメリカ軍による東日本大震災への救助活動は、震災直後から迅速な対応をみせ、被災各地で優れた力を発揮し、その無償の行為は、被災民のみならず多くの日本人に感動を与えた。「トモダチ作戦」は、一方において、日米同盟の絆の深さと信頼性、そして前方展開アメリカ軍の威力を諸外国に認識させたことも事実であろう。

トモダチ作戦には、アメリカの陸軍、海軍、空軍、海兵隊から人員約 20,000 人、艦船 22 隻、航空機 140 機が参加し、行方不明者の捜索、救助物資(食料 189トン、真水 7,729トン、燃料・非常食・衣服・医療品等 87トン等)の被災地への輸送、仙台空港・大島・八戸港・宮古港の復興作業や石巻の小学校の瓦礫除去などを実施した。

2. 東アジア海域の安全保障環境への影響

(1) 日本で民主党が政権を交代して以降、インド洋における海上自衛隊による給油活動の停止、普天間飛行場の移転問題、アメリカ国務省メア前日本部長の「沖縄の人々はゆすりの名人」発言等、日米関係は揺らぎ続けてきた。「トモダチ作戦」は、日米関係を好転させる機会を与えたと言える。日本人の中で、在日米軍基地の重要性についての理解が高まれば、それは日米同盟の強化につながる。

(2) 「トモダチ作戦」の進捗に併せて、オバマ大統領、ウイラード太平洋軍司令官、ウォルシュ太平洋艦隊司令官、ルース駐日大使等が、タイムリーに声明や記者会見でアメリカ軍の行動能力の高さと日米同盟の絆の深さをアピールしており、これらは、「トモダチ作戦」の実施と合わせて、日本防衛上の抑止力となるのみならず、地域の安全保障へのアメリカの関与の重要性を地域諸国に認識させるものとなるだろう。

(2) 「トモダチ作戦」は、ロシア、中国、東南アジア諸国等にも、前方展開アメリカ軍の対応能力の高さと日米同盟の信頼性を認識させるものとなったはずである。そのことは、不安定化する東アジアの海域の国際安全保障の在り方に大きな影響を与えるであろうことに疑いはない。